歌唱表現へと繋ぐ音楽鑑賞の在り方
―幼稚園における実践を通して―

宮　坂　　明

The Way of Music Appreciation to Connect to The Song Expression
―Through the Practice in Kindergarten―

Akira Miyasaka

（2019年11月27日受理）

はじめに

幼稚園における音楽の位置づけは、領域「表現」として「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」（幼稚園教育要領）ために行われる教育活動の要素のひとつとして捉えることができよう。小学校及び中学校の教科（音楽科）のように明確なものではなく、「表現」という領域から考えても音楽鑑賞といった概念は希薄と思われる。本論文では、音楽鑑賞の概念を考えた上で、実際に幼稚園において行った実践活動を検証して幼稚園における音楽鑑賞の在り方、その中でも特に歌唱表現へと繋ぐための在り方を論じた。

１．音楽鑑賞の概念

一般論として

鑑賞とは、大辞林第３版によれば「芸術作品のよさを味わい楽しみ理解すること。」である。したがって音楽鑑賞とは、芸術としての音楽作品を聴くことを通してその良さを味わい楽しみ理解することといえよう。もう少し述べるならば、音楽美に関する審美眼を磨くことによって芸術としての音楽作品の価値を認め、享受を追求するものであろう。

音楽科における鑑賞

第二次世界大戦後、学校教育における具体的な目標や内容などは、学習指導要領によって示されるようになった。音楽科についても然りである。音楽科の学習領域は、当初、細分化されて示されていたが、1958年（昭和33年）の改訂以後、表現（歌唱・器楽・創作）及び鑑賞に整理され今日に至っている。現行の小学校学習指導要領音楽科の目標「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」もこの流れに沿ったものである。「表現」と「鑑賞」の関係について、指導要領解説には相互に関わり合っている旨の記載がある。つまり、二つの領域は相関関係にあり、表裏一体といえよう。このことから、音楽科における鑑賞は、先に述べた一般論としての鑑賞と併せ、表現活動の質の向上といった要素が加わると考えられる。また、学習指導要領の内容からは、我が国の音楽を含め多様な音楽に親しむことで、自国文化の理解、国際理解、異文化理解といったことも指導内容としての重要な事項といえる。

領域「表現」における鑑賞

幼稚園教育要領における音楽と関わる事項の記載は、随所に散見されるが、主たる記載は領域「表現」においてである。この領域は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする。」ために設置されている。要領解説のなかに内容⑹「音楽に親しみ，歌を歌ったり，簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」の解説として、「教師と一緒に美しい音楽を聴いたり，友達と共に歌ったり，簡単な楽器を演奏したりすることも，幼児の様々な音楽にかかわる活動を豊かにしていくものである。」や「このように，幼児期において，音楽にかかわる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。」といった記載がある。このことから、幼児であっても良質な音楽を聴くことは表現するために必要であるし、成長過程において大切なことといえよう。

執筆者紹介：中村学園大学短期大学部幼児保育学科
別刷請求先：〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1　E-mail：miyasaka@nakamura-u.ac.jp

２．実践と検証

この研究における実践は、中村学園大学付属壱岐幼稚園において2013～2016年の４年間、計５回行った。第１回の実践は、お遊戯会の最後に歌のプレゼントとして約５分間の演奏を行った。この時はあまり研究を意識したものではなかったが、演奏を聴いている時の子どもたちの姿に心打たれるものがあり、継続して行って音楽鑑賞の可能性を探り、その在り方を検討したいとの考えを持った。第２・４・５回の実践については、時期や子どもたちへの効果を検討した結果、第１回と同様にお遊戯会における歌のプレゼントとして約10分間の音楽鑑賞の時間を設定することにした。なお第３回だけは、誕生会においてフルート独奏及びリコーダー合奏を行った。すべての実践において、ゼミ所属学生の協力を得ている。それぞれの実践の具体的な内容及び検証については、後に詳述したい。

当該園の音楽の状況

通常の教育活動では、月２曲の歌唱曲を選定し、指導を行っている。演奏容易な打楽器は、適宜、使用される。歌唱表現の発表の場としては、３つの大きな催しが存在する。「夏祭り」「お遊戯会」「卒園式」である。「卒園式」以外では、通常の教育活動と同様、演奏容易な打楽器が適宜、使用される。また「夏祭り」では、年長児による和太鼓が演奏される。指導者の力によるところが大きいが、当該園の園児たちは自然な発声による伸びやかな歌声を持っており、よく歌うことから保護者から一定の評価を得ている。教員の範唱を聴くことはあるが、純粋に音楽を鑑賞する機会は乏しい状況にある。

第１回
2013年12月7日（土）お遊戯会
対象：年長児及び年中児（園児の保護者）
場所：遊戯室
演奏曲
ア・カペラによる４声のクリスマス・キャロル２曲（いずれも英語歌詞により歌唱）
『Deck the Hall』
『Joy to the World』
※演奏において13名のゼミ学生が協力
大学４年生６名（女子５名，男子１名），大学３年生７名（女子６名，男子１名）

先に述べた通り、この時はあまり研究を意識したものではなかった。お遊戯会において、学生の手伝いが必要ということでゼミとして協力し、音楽のゼミということで併せて歌をプレゼントするというものであった。選曲にあたっては、12月という時期を考慮してクリスマス・キャロル２曲を演奏することにした。クリスマス・キャロルは、キリスト教文化圏においてキリストの誕生を祝って歌われるものである。当該園は、キリスト教の教義に基づいた教育を行っているわけではないが、日本ではクリスマスは国民的な行事といえる状況であることから、よく耳にする楽曲を演奏することにした。英語の歌詞としたのは、この時期にあちこちから流れてくるクリスマス・キャロルの多くが英語の歌詞との判断による。もともと『Deck the Hall』はウェールズ民謡に基づいており、Thomas Oliphant の作詞（英語）であることから日本語の歌詞は不自然である。また『Joy to the World』は、イギリス人牧師 Isaac Watts の作詞に、アメリカの音楽家 Lowell Mason が作曲したものである。年少児が対象となっていないが、お遊戯会が長時間に渡ることや遊戯室の収容人数の関係などから、年少児は途中で退室している。

【検証】

演奏中の園児の様子は、特に年長女児の食い入るように見つめ聴く姿が何人も見受けられた。文章として表現するのは難しいのであるが、未知のものに接し、それが何であるかを見極めようとする強い視線のようなものを感じた。また、目を輝かせて聴き入るといった姿が見受けられ、目がキラキラと輝くとはこういうことかを実感した。鑑賞後の子どもたちの反応について、担任からは「すごかった」「きれいだった」等の園児の感想を得た。また、その後の歌唱活動において意欲や表情に変化があったとの報告があった。一緒に演奏を聴いた保護者からも肯定的な感想が寄せられた。なお、クリスマス・キャロルを演奏したことに対し、宗教的な内容を持ち込んだというような意見はなかった。

担任から「子どもたちも楽しめるものを取り入れて欲しい」という要望があった。これについては、次回以降の演奏にあたり改善が必要と考えた。

第２回
2014年12月６日（土）お遊戯会
対象：年長児及び年中児（園児の保護者）
場所：遊戯室
演奏曲
ア・カペラによる４声のクリスマス・キャロル２曲（いずれも英語歌詞により歌唱）
『Angels We Have Heard on High』
『The First Noel』
園児も一緒に楽しめる歌
『とんでったバナナ』
※演奏において10名のゼミ学生が協力
大学４年生７名（女子６名，男子１名），大学３年生３名（女子３名）

クリスマス・キャロルについては、第１回とは演奏曲

を入れ替えた。また、「園児も一緒に楽しめる歌」として『とんでったバナナ』を取り入れた。これについては、選曲、演奏及び演出のすべてを学生に委ねた。パネルシアターとペープサートを組み合わせ、歌詞に描かれた場面が徐々に進行する中を、登場人物とバナナが動くといった演出がなされた。

【検証】

クリスマス・キャロル演奏中の様子は、前回と似た感じであった。『とんでったバナナ』について、担任からは冬にこの曲はどうかといった意見もあったが、学生たちが選曲し工夫を凝らした演出が効果的であったようで、子どもたちには概ね好評であった。お遊戯会後、数名の男児が「おもしろかった」と言いに来てくれた。担任から要望として設定した「園児も一緒に楽しめる歌」は、成功したと考える。

第３回

2015年１月28日（水）１月生まれ誕生会

対象：全園児（誕生児の保護者）

場所：遊戯室

演奏曲

フルート独奏（ピアノ伴奏）

『ポロネーズ』（管弦楽組曲　第２番　ロ短調から）バッハ作曲

リコーダー合奏

映画『アナと雪の女王』主題歌『Let It Go』

※演奏において７名のゼミ学生が協力

大学４年生７名（女子６名，男子１名）

『ポロネーズ』については、学生の伴奏により筆者が独奏した。この楽曲は、小学校学習指導要領音楽科において長く鑑賞共通教材として示されていた。鑑賞共通教材は平成10年12月告示要領から示されなくなったが、鑑賞教材選曲にあたっては、かつての共通教材に依存する傾向があり、現在もよく鑑賞されている。『Let It Go』については、学生が選曲し演奏した。編曲は、ソプラノ・アルト・テノール・バスの各リコーダーによる四重奏である。学生の人数の関係から、ソプラノとバスを２名に増員した。

【検証】

本研究の趣旨からは若干逸れるが、子どもたちにとっては聴く機会が極めて稀な演奏に接した感じが伝わってきた。『ポロネーズ』は、静寂の中、「狐につままれた」といった表現がぴったりな様子で聴いていた。『Let It Go』は、演奏が始まると同時に子どもたちの体が揺れ始め、歌のメロディが流れると大合唱であった。子どもたちの様子から、歌唱表現へと繋ぐ音楽鑑賞を考えたとき、子どもたちが大好きな曲を器楽編曲で聴くことも有効と考えた。

第４回

2015年12月５日（土）お遊戯会

対象：年長児及び年中児（園児の保護者）

場所：遊戯室

演奏曲

ア・カペラによる４声のクリスマス・キャロル２曲（いずれも英語歌詞により歌唱）

『Deck the Hall』

『Joy to the World』

園児も一緒に楽しめる歌

『あわてんぼうのサンタクロース』

※演奏において13名のゼミ学生が協力

大学４年生３名（女子３名），短期大学１年生10名（女子10名）

クリスマス・キャロルについては、第１回と同一曲とした。演奏にあたり、低声部のバランスを考慮して学生の協力と併せ、音楽部門所属の男性助手の協力も得た。また、「園児も一緒に楽しめる歌」については、第２回と同様、選曲、演奏及び演出のすべてを学生に委ねた。

【検証】

『あわてんぼうのサンタクロース』については、第２回選曲よりも背景が簡易であったが、多くの子どもたちが一緒に歌っており、概ね好評であった。どの程度の演出ができるかは、歌詞の内容に左右される。選曲にあたって熟考が必要であろう。ただし、時期の考慮なども必要であり、容易にはいかないと考える。

第５回

2016年12月３日（土）お遊戯会

対象：年長児及び年中児（園児の保護者）

場所：遊戯室

演奏曲

ア・カペラによる４声のクリスマス・キャロル２曲（いずれも英語歌詞により歌唱）

『Angels We Have Heard on High』

『The First Noel』

園児も一緒に楽しめる歌

『赤鼻のトナカイ』

※演奏において11名のゼミ学生が協力

短期大学２年生５名（女子５名），短期大学１年生６名（女子６名）

クリスマス・キャロルについては、第２回と同一曲とした。演奏にあたり、前回に引き続き、低声部のバランスを考慮して学生の協力と併せ、音楽部門所属男性助教の協力も得た。また、「園児も一緒に楽しめる歌」については、これまで同様、選曲、演奏及び演出のすべてを学生に委ねた。

【検証】

『赤鼻のトナカイ』については、背景は用いず、歌詞内容にそった衣装で雰囲気づくりをしてくれた。今回も多くの子どもたちが一緒に歌っており、概ね好評であった。これも演出の工夫といえよう。

3．歌唱表現へと繋ぐ音楽鑑賞の在り方

幼児期の音楽活動とは、心を豊かにするための活動ではないだろうか。この活動にあたっては、想像力、表現力、音楽能力といったことが問われる。これらの力を向上させるには、子ども自らが興味・関心を持ち意欲的に取り組むことが重要である。歌唱は、幼児にとって身近な活動であり、楽しく歌うことでこのような力を養えると思われる。要領解説に「幼児は，一般に音楽にかかわる活動が好きで，心地よい音の出るものや楽器に出会うと，いろいろな音を出してその音色を味わったり，リズムをつくったり，即興的に歌ったり，音楽に合わせて身体を動かしたり，ときには友達と一緒に踊ったりしている。」という記載があるように、きっかけは難しくないと思われる。これをどのように向上させていくかは、悩めるところである。要領解説には、音楽に親しむ姿勢として「正しい音程で歌うことや楽器を上手に演奏することではなく，幼児自らが音や音楽で十分遊び，表現する楽しさを味わうことである。」といった記載があるが、幼児であっても音の追求なくして豊かな情操の育成は困難であると考える。音の追求にあたっては、意欲をいかに持続するかが重要であろう。今回の実践は、このことのヒントを与えてくれたと考える。子どもたちの目の輝きは、あのように歌いたいという憧れであり、意欲へと繋がる。適切な音楽鑑賞は、歌唱表現に繋がるといえるのではないだろうか。歌唱表現に繋がる音楽鑑賞を一律に定義することはできないが、次の三点などは重要と考える。なお鑑賞にあたっては、子どもたちが楽しめる要素を盛り込むことも必要といえよう。また当然ではあるが、日頃から教員が範唱を丁寧に行うことも重要である。

【歌唱表現に繋がる音楽鑑賞として重要と考える三点】

・子どもたちでは演奏できない少し高度な演奏を鑑賞する。
・季節を考慮し、園外で子どもたちが耳にすることがある楽曲を鑑賞する。
・自分たちも同様に歌いたいと感じることができる演奏を鑑賞する。

おわりに

実践を通した本研究により、幼稚園における音楽鑑賞の在り方について、ある程度の方向性を得ることができた。今後は、他の幼稚園における音楽鑑賞の実態などを調査して、より多くの幼稚園において歌唱表現向上に繋がるような音楽鑑賞の在り方を検討したいと考える。

主な参考文献

供田武嘉津『音楽教育学』音楽之友社，1975
渡邊學而『音楽鑑賞の指導法』音楽之友社，2004
西園芳信『音楽科カリキュラムの研究』音楽之友社，1998
石井玲子他『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』保育出版社，2009